

## 第七話

# 重くなった仏

## 石上の厨子

「えらいこっちゃぞ。都から西国へかけて、大いくさじゃそうな……。」

「おお。この間も、街道を埋めつくして、大勢のいくさ人が上がっていったそうな。」

「このあたり、その争いに巻き込まれねばよ  
いが……。」

「まったくだのう……。いくさで弱りはてるのは、いつもわしら百姓ばかりじゃ。」

「……ところで、あそこの道端で、旅のお坊  
さまは、何をしてござるのだらうえ。」

時は寿永元（一一八二）年の8月、源平の

争いに鞆あしのようにおののく阿久比谷、矢口の里人たちの目に、路傍で一心に念仏ねんぶつを続ける一人の旅僧の姿が映りました。

しわ深く刻まれた赤銅色の顔は、砂塵と残暑の汗にまみれ、長い旅路の果てを思わせました。

彼の前の草むらの石上には、大切に背負ってきたと思われる厨子ずしが安置され、それに向かつて、両手をひしと合わせつつ、一心に念仏ねんぶつを続けています……。

げんそうに集まってきた里人たちは、次第に念仏三昧ねんぶつざんまいの姿に打たれて、いつしかその後ごに寄り添い、声を合わせる者が一人二人と増えてゆきました。

「あの……もし、お坊さま。いかがなされましたか。」

旅僧の念仏が一刻ぎりしたとき、一人の老人が、手を合わせたまま、おずおずと進み出て尋ねました。

「おお、これは、この里の方々でござるか。わたしは済乗坊と申し、長らく比叡のお山で修行をいたし、また、京の吉水で法然上人さまの教えを受けた者でござるが、心願のことがあつて、この三年ほど諸国を巡り、今日この里へ足を踏み入れたばかりでござるが、思わぬことが起き申した……。」

「思わぬこととは、それはなにごとでござりまするか。」

「実は、これに捧持してまいり申したみ仏が急に重うなられて、どうしても動かせてくたさらぬ。それゆえ、路傍の石の上に安置してただお念仏を申し、お供養をいたしておりましたのじゃ。」

「お坊さまは、なににして、この仏さまを背負つて、この六十余州を巡っておられますのじゃ……。」

「はい、このみ仏は、わが国に三体だけの尊いみ仏にまします。不思議なご縁がござつて、



わしがお伴を申し上げることになりましたの  
じゃが……。」

### 一光三尊の仏

済乗坊と名のる旅僧は、熱心に聞く矢口の  
里人に、仏の由来を語り続けるのでした――。

このみ仏は、一光三尊仏と申し、まことに  
尊いお姿でござる。

話せば長いことながら、庵で念仏三昧中の  
わしのもとへ、ひそかに平家のお使者が来ら  
れ、平重盛さまの小松のお館に案内されたは、  
今から三年前の治承3年7月のことであつた。

重盛さまは、当時飛ぶ鳥落とす勢いの清盛  
公の御曹子で、誠実で思慮深く、天下の信頼  
厚いお方であられたが、ともすれば権勢にお  
ごりやすい父君やご一門を常に戒められ、そ  
のご心労が重なって、病いの床に伏しておら  
れた。

その夜、わしを枕もとに呼び寄せられ、苦

しい息の下で、こう申されたのでござる。

「わしは、もう余命いくばくもない。貴僧に  
たつての頼みじゃ。わが枕辺のご尊像は、か  
たじけなくも、聖徳太子さまが霊夢を受けら  
れて難波の入江に沈ませたもう百済仏を得ら  
れ、それを模して三体刻ませられた、一光三  
尊仏の一体である。長い間、宮中の奥深く奉  
安されていたが、帝の思し召しにより、わが  
持仏としてお移りになられたものである。」

わしの亡き後、平家の行く末はまことに危  
ぶまれる。この由緒あるみ仏に兵火が及んで  
はならぬゆえ、貴僧、何とぞ、ご尊像を護持  
して、み仏のみ心にかなう地を尋ね当て、終  
生お仕えしてたまわらぬか。」

……あれからすでに三年、伝え聞くに、清  
盛公は他界され、源氏の兵が都に乱入し、平  
家は西海へ逃れ去つた由、重盛公の予見のと  
りとなつた。わしは、兵火を逃れつつ、ご尊  
像を負いたてまつり、六十余州の旅を続けて

まいり申した。

ところが、不思議なことに、この里へ足を踏み入れ申すと、み仏が急に重うなられ、負いづるが肩へ食い込んで、もう一步も歩かれぬ。そこで、お厨子を路傍に安置して、念仏申し上げていたのでござるが、皆の衆もよくご唱和くだされた。

見渡せば、この里は緑が濃く穏やかで、眼下には青い海が入り込み、そよ吹く風も心地よい。里人たちも信心厚い方々とお見受けした。

み仏が重うなられたは、この里を永住の地と思し召されたに違いない――。

一部始終を聞き終えた里人たちは、思わずみんな手を合わせて、お念仏を唱和し出しました。

こうして、このみ仏はこの矢口の里に祀られることになり、済乗坊はじめ、里人たちの手で、次第に堂宇が整備されて、念仏称名の声

が一带に響き渡るようになりました。今の済乗院の起こりです。

### 阿久比の仏寺



— 光三尊仏 —

仏教が正式にわが国へ伝えられたのは、欽明天皇の代（五五二）に百済の聖明王から仏像・経典が獻ぜられた時とされるが、その賛否に豪族

の争いがからみ、一時は、堂を焼き像を捨てるといふ事件を招来したが、蘇我氏の台頭と共に、聖徳太子の登場となる。当地へ寺院が建てられるようになったのは、平安時代に入ってからと考えられ、天台宗・真言宗であったが、鎌倉時代以降改宗されたものが多い。本話の済乗院も、初め天台宗であったが、浄土宗に改められたと伝えている。



— 済 乗 院 —

## 第八話

# 古見堂地蔵

平治2（一一六〇）年正月3日、英比莊の村々では、子供たちがたこ揚げを楽しみ、竹馬に興じる、のどかな正月でした。

この時、血相を変えた騎馬武者が一騎、南の方から息せき切って駆けてきました。この武士は渋谷金王丸といい、源義朝の家来でした。

平治の乱で平清盛に敗れた義朝は、命からがら都を逃げ出し、平治元年12月30日、家臣鎌田政家の舅に当たる野間莊の長田忠致の屋敷に落ち着いたのでした。しかし長田は、ひそかに義朝殺害を計画し、平家に取り入り、恩賞にあずかるうとしていたのです。

明けて正月の3日、長田は鎌田や渋谷ら義朝の家来たちを使に出してから、義朝に朝風呂をすすめました。計画とは知らずに湯殿に案内された義朝は、無残にも丸腰のまま切り殺されてしまいました。「吾に木太刀一本ありせば、汝らに討たれまいものを。」と言って死んだのです。

長田は金王丸たちが帰ってこないうちに、首を持って京都へ走り去りました。

使いから帰った金王丸は、この大事件に仰天し、主君の首を奪い返さんものと、長田一族と戦いながら、馬にまたがり息せき切って阿久比の古見堂まで来たのです。

しかし、馬が疲れ果て、もう一步も進まないで困っていると、路傍の地蔵堂が目に留まり、そこで休息を取ることにしました。

通りすがりの村人へ乗り継ぎの馬の手配を頼んで、金王丸は、こみ上げてくる激怒を押さえつつ、新たな闘志を燃やすのでした。安

らかなお顔の地藏さまは、心にゆとりを与えてくれました。傍らに湧き出る清水は、のどを潤し、活力をつけてくれました。

ひと時の休息の後、お礼の気持ちを含め、主君の仇を美事討つことができるよう祈願して、最前の馬のくつわをお堂に奉納すると、再び京を目指して走っていききました。

それから年を経ること幾星霜、村人たちはこの古見堂地藏を信仰し、子供が生まれると、金丸丸のようにじょうぶに育つよう参詣してきました。

ある夜、卯之山の最勝寺の住職の夢枕に、一人の鎧武者が現れ、

「私は渋谷金丸である。その昔、古見堂地藏尊にはたいへんお世話になった。ところが今見るに、お堂がひどく傷み、雨ざらしになっておられる。なんとか修理してほしい。」  
と言って消え去りました。住職は早速地藏さまを本堂に丁重にお迎えすることにしました。

その後「最勝寺に古見堂地藏さまが移ったのは、金丸丸のお告げだそうな。」「子供の虫封じに靈験あらたかだそうだ。」という評判がたち、子供連れの参詣者が絶えないということです。

### 最勝寺



寺伝によれば、天武天皇の世、役行者を開基とし光円が開いた大恵山長泉寺と最勝寺を合併し、この地へ巡錫の際、

本尊大日如来を安置、平安時代に改宗して、天台宗に属し、大円山最勝寺と改号、七堂九院の大伽藍が整備されていたが、度々の兵火で消失して現在の規模となったという。また、大場の地に、大場山宝幢寺という寺があったが、江戸時代中期に名古屋へ移転し、残された子安地藏と村内にあった古見堂地藏は、当寺に移転、安置されたと伝えられている。

## 地名の話 (1)

皆さんは、ご自身の姓の由来をお知りになりましたか。同じように、自分の住んでいる町や地の名まえの由来に興味をお持ちでしょう。古来、地名に言及し、ユニークな考えを述べておられる人が多いのですが、地名を科学的に解明しようとする研究が緒にいたばかりで、結論は将来にゆずり、ここではいろいろな説を紹介するにとどめます。(出典はスペースの都合で省略します。)

### ① アグヒかアグイか

阿久比を見る限り、ヒのように思われます。しかし、昔のヒは現代はイと発音されることが多いのです。(歴史的かなづかい―現代かなづかい)念のため、日本の同名地も含めて、アグイが昔どう書かれたか調べてみます。

ヒ―阿久比・英比・空干・足昨・安喰・飽喰・足杣……

イ―江入・阿古屋……

その他―江古谷・開江・阿古屋……

この中、喰・杣は、歴史的かなづかいはクヒですが、現代ではクイと発音します。そう考えると、昔はアグヒだったが、現在はアグイとするのがよいのではないのでしょうか。なお、クカグカ、これ

も問題となるところです。

### ② アグイは何を意味するか

ア、昔、中央に入江の海があつたから―江入・開江・空干・江古谷 説

イ、この地の土は粘土質で、雨後の歩行が困難となるから―足昨・足杣 説

ウ、アグ・アク・アコは南方海洋民族語で、低地・入り海・海女・真珠貝を意味し、当地の海で真珠がとれたから―阿古屋 説

エ、アグ・アコはリヤン語で国を意味し、この地は文化が早く開け、独立国となっており、そこに

いる人だから―阿古屋 説

オ、米がよく育ち、食料の豊富な、食生活に満ちたりた土地だから―飽喰 説

まだまだいろいろありますが、さて皆さんはどの説に賛成でしょうか。

### ③ 英比はなんと読むか

奈良時代の初め、地名には佳字を用いよという法令が出ており、公式書はすべて英比郷・英比荘と記載されましたが、地名の英比はエイビではなく、アグイと読んだものでしょう。

地名の話 (2)

各地区の地名の由来についてのいろいろな説を紹介してみよう。

**横松** (ワ横回りの津(入江の横の港) (ワ)横ママの津(長く尾を引く崖のある港) (ワ)舟人の目印や舟つなぎ松のある港)

**菘** (ワ脇(宮津の隣) (ワ)ハイ(小さな平地)(ワ)ハリ(開墾地))

**宮津** (ワ宮の津(熱田社のある港) (ワ)三谷の津(い)くつかの入り込みある港) (ワ)中心の港

**福住** (ワ深隅(海の深く入り込んだ地) (ワ)くれた地形の隅(ワ)県社に守られた福の住む地)

**板山** (ワイタタラ山(鑄物を造る地) (ワ)至って奥山(ワ)板屋根の点在する山村 (ワ)丘の形)

**白沢** (ワ白埴土の沢(ワ)後の沢(ワ)英比磨の命名地(伝説) (ワ)養老年間、正保新田と言われた)

**草木** (ワ草切・草起(開拓地) (ワ)奥去り(奥の地) (ワ)木迫(薪を取る地) (ワ)坂部連葉の名から(伝説))

**坂部** (ワ酒部(酒造者の住地) (ワ)坂辺(坂の下)の村(ワ)坂部連葉の姓(ワ)坂部二十郎家の縁)

**卯之山** (ワ海止(海岸) (ワ)兔の山(弘誓院伝説)(ワ)卯の花咲く山(卯坂は前二つの合併)

**稗の宮** (ワ干江(海岸) (ワ)英比の転倒(ワ)日吉神を祀る地(ワ)種豊作の神の地)

**棕原** (ワ棕の木が生えている原(ワ)棕の太木で目立つ土地)

**角岡** (ワ津の岡(港の奥の丘) (ワ)平泉寺伝説の邪鬼を埋めた丘)

**矢口** (ワ谷ヶ地(谷の口) (ワ)箭比神社の地)

**高岡** 文字どおり高い丘 (ワ)高は前二つの合併 (ワ)矢高は前二つの合併)

**植** (ワ)上(高いところ) (ワ)海江の山手(ワ)植物が青々と繁茂する地)

**大古根** (ワ)尾小根(小高い丘の延長地) (ワ)大河根(大河のもと) (ワ)昔、石坂村と市場村に分かれていた)

(ワ)植大は前二つの合併

以上が阿久比谷十六か村の村名で、現在も地名として残っているものですが、それぞれの地名には前述のように私たちの祖先や先住者の長い思い出が残されています。そういうことを念頭に置いて、皆さんの住む字名の由来をいろいろ考え、皆さんで話し合ってみよう。



## 第九話

### 伍大院の墓

一人の老婆が涙声で申します。

「伍大院さま。今日はどうしてもお別れせねばなりませんのか……。」

「おお、これは、喜蔵さのおばばか。ようその痛む足でここまで送ってくれたのう。先日も話したとおり、わしの決心は変わらぬ。いよいよお別れじゃよ……。」

春霞に煙る草木の里から出た異様な人々の行列が、西の郷のはずれにある小高い丘へ通じる坂道を、とぼとぼとどつていました。

迷故三界城……などと書かれた四本の小さなのぼり旗に囲まれた白装束の老人を中心に、数十人の村人たちが、口々に念仏を唱え、数珠を繰りながら、しとしとと、重そうに足を運んでおりました。

丘の上の、最近掘られたばかりと思われる深い穴の前に一行が到着すると、若い二人の村人に支えられた行者の袖にすがりついて、

伍大院と呼ばれる鶴のようにやせた白装束の行者は、ゆつくりと穴の前にあぐらをかき、静かに村人たちを見渡します。人々も、かれの言葉を一言も聞きもらずまいと、半円を描くようににじり寄って座りました。

木食・穀断ち・水断ちと続く長い苦行の末とは思われず、伍大院の声は、隅までよく通りました。

「さて、皆の衆。今まで長い間まことにお世話になり申した。

鎌倉の執権さまが討たれた後、打ち続く南北二つの帝をいただいた争いに国中が大揺れ

に揺れ動き、国民は塗炭の苦しみの連続でござったが、このごろやつと穏やかな世が到来しそうに思われる。

わしも、三年がほど前、表の街道をはずれて、この里へ足を踏み入れ申したのだが、こうして皆の衆に大勢送ってもらい、往生を遂げられるとは、まことにこの上ない喜びでござる。だが、わしがここまで思いつめたのは、今初めて明かし申すが、深い訳があるのでござる……。」

## 鉦の音

「……実を申せば、わしは、執権・北条高時さまに仕え、妹が奥方にあげられた由緒ある御家人であつた。

新田義貞が鎌倉へ攻め入る直前、主君から若君を託されたわしは、主君を見限つたと偽り、若君をわが子として育てておりもうしたが、新田方の催促きつく、いずれ露見と覚悟

して、かわいいわが子に因果を含めて、若君として敵陣へ送りもうした。

たとえ主君の御ためとは言え、涙をのんでわが子の死を平然と見ねばならぬ……、わしの痛恨、お察しください……。

若君は無事に隠しおおせて、その後わしはわが子の菩提を弔うため、六部となつて廻国流浪の旅に出たのじゃが、街道筋では、『この人非人』『ろくでなし』とののしられ、子供にさえ石を投げられ、つばを吐きかけられもうした。そこで、山に隠れ、野に伏して、ひたすら念仏苦行を続け、ご縁があつてこの里まで流れてきたが、皆の衆の一方ならぬ手厚いもてなしに、こここそ現身往生の勝地と知りもうした。

末世の世にわが身を埋めて、はるかな弥勒の出現を待ち、また、長くこの里の守りとなろうと覚悟を決めたこのわしを、どうか快く送ってください……。」



——白木の棺かたに入った伍大院は、息抜きき抜きの竹竿さおを立てて、丘の土中深く埋められました。

「おお、まだ鉦かねの音が聞こえるぞ……。」

交代で墓のお守りももりをする村人たちは、かわるがわる竹の口に耳を当て、そしてささやき合いました。人々全員が墓の前に集まりだした十数日後、かすかに聞こえていた鉦の音がふっと絶え、ただ松の枝を吹き通ってゆく風の音だけが残りました。

もうみんな泣く者はありませんでした。全員が地面にペタンと座って、固く手を合わせておりました。だれからともなく、お念仏の声が起こり、次第に多く高くなって、丘下の村里へ流れてゆきました。

伍大院さまが、この村をいつまでも守ってください——人々はそう言い合い、お墓の上に石塔を建て、周りの掃除を怠りませんでした。今もお酒や供物を供え、お念仏講を勤めることがならわしになっています。



— 伍大院の墓 —

ここに登場する伍大院の説話は、鎌倉時代末期から江戸時代初期にかけて日本各地に見られる「土中入定」をとりあげたものである。

湯殿山（真言宗）系の山伏行者（修験者）が、自分の過去に犯した罪業を清算したり、病厄災難に悩む人々に代わって苦しみを受けるため（代受苦）や、末法の世が終わって弥勒菩薩が出現されるまでミイラになって待とうとする目的で、自らを土中に埋めたり、断食断水をして死ぬという、悲壮な宗教的自殺行為である。

ここでは、同名の人物が太平記に載っているところから、時期を室町時代初期の春と仮定したが、正盛院の過去帳に記載される親族の死亡年月から江戸時代初めの秋とし、草木地区では、毎年9月21日に墓前供養を続けている。

なお、(六十)六部というのは、日本国中の国々へ法華経を納めて回る廻国行者で、それにまつわる伝説が当町には残されているが、ここでは割愛することとした。

## 第十話

### 阿久比谷虫供養

#### (1) 良忍上人

時は天承2(一一三三)年の夏のことでした。

「だんだん浜供養が近づいてきたのう。」

「ああ、去年は草木村で山供養だった。順番

からいけば、今年も川堤の柳の広場じゃ。

わしは、あの慈覚大師さまや法然上人さま

が自ら描かれたという阿弥陀さまの前でのお

念仏がありがたくて、その日が待ち遠しくて

ならぬわい。」

「わしは、あの鉦の音が今も聞こえるよう

じゃ。」

「あの鉦は、都の天子さまが大切にしておら

れた御鏡を、わざわざ鑄直いなおしてくださったものとか……。」

「それにしても、上人さまのお念仏はありがたくて、いつお聞きしても、涙がこぼれてのう。」

「なにしろ、四十八歳の御時に阿弥陀さまから直々じきじきにお受けなされたというお念仏じゃ。」

お生まれの富田が、ここと近いお陰で、こうして度々おいでくだされる。わしらは、ほんに、果報者よのう。」

——阿久比谷の人々は、融通ゆうつう念仏宗の開祖、良忍上人の訪れを、首を長くして待ちこがれるのでした。

「おおい、えらいこつちやぞよ。上人さまは、大原おおはらのご本山で、春の中ごろおなくなりになつておられたということじゃ。」

「えーっ、それじゃあ、この谷のお念仏は、これからはどうなるのかえ……。」

人々は頭をかかえこんでしまいました。とにかく、なんとかしなければならぬ。各

村から代表が集まり、善後策の相談が始まりました——。

「皆、この、年一度のお念仏を待ちこがれている。これは絶やしてはならぬ。」

「むろんだとも……。だが、間近に迫ってきている今年のお念仏は、どうしようかのう。」

「今度はわしの村が当番になるはずゆえ、責任を持つてお道場は整えよう。だが、お念仏の段取りは、どうしたらよいか……。」

「それは、去年勤めたばかりの草木の衆が一番よく知っているはず。とにかく頼み込んで、先達せんだつになつてもらい、各村の代表も仲間に入つて、それで音頭おんどをとつたらよいではないか。」

「おお、それはよい思案じゃ。上人さまがおいでにならなくとも、この谷では、各村巡り回りで続けて行くこうではないか。」

こうして、阿久比谷の百万遍念仏は、絶えることはなく、かえつて乙川村や有脇村も加えて盛大になっていきました。

## (2) 大塔婆

旧暦7月の末、年号が長享ちやうきやうと改められたばかりのころ、角岡村の平泉寺へいせんじには、偉いお坊さまが説教においでたということで、村々から大勢の参詣者が押し寄せ、まだ残暑の厳しい境内の土の上にぎっしりと腰を下ろしておりました。

その僧は、じきに五十に手が届くと思われる年ごろで、長い間の厳しい修行と遠い説教の旅にやつれてはおりましたが、堂の内外へよく響き通る声で、巧みに語りかけていました。

「拙僧は真盛しんせいと申し、伊勢の国は一志郡の生まれでござる。法縁があつて、熱田の宮のお鍵所かぎ、野田の密蔵院で出家し、その後、比叡ひえいのお山に登って、横川よかわで二十年血のじむ修行をいたしました。

この英比の荘はお宮にゆかり深いところでもあり、また、密蔵院を本寺とするこの寺の住持のお招きもあつて、皆の衆に法話をさせていただくこととなりもうした。

さて、人間は死ぬると、長い冥途めいじとの旅へ出るのでござるが、十王じじやう経というお経では、七日ごとに十人の王さまが生前の行いに基づいて亡者もうじやを裁かれます。……」

真盛と名のる上人は、柱に掛けられた十王図を指さしながら、巧みな話術で念仏の功德くどくを説いてゆき、人々は身じろぎもせず、全身を耳にして聞きほれてゆきます。

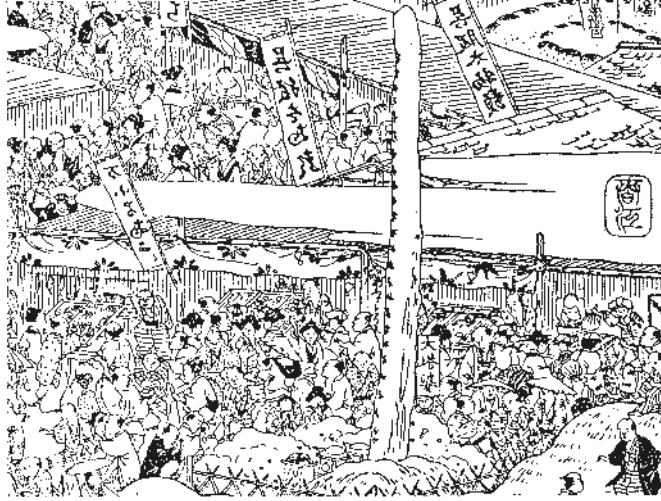
「……このようにお念仏は、まことにありがたいものでござる。

ところで、この谷には昔から、良忍上人のお導きによる百万遍念仏が続けられていると聞いておる。まことに結構なことで、どうか孫子まご末代まで続けてほしいものじゃ。

だがのう、念仏の功德は、人間だけではご

ざらぬぞ。もの言わぬ鳥・獸・果ては、名もなき虫けらや草木にまでも及びまする。……」

説教が終わっても、村人たちは、なかなかそ



— 尾張名所図会より —

の場を去りませんでした。感動が人々を縛りつけて放さないのです。

「のう、もうじきお念仏の日がやってくるだ

が、お上人さまは、鳥・獸や虫けらにも、そのお功德を施せと申された。わしは、今度のお念仏からそうやった方がいいと思うのだがのう……。」

「おお、ええことを言わしゃった。おれも、さつき、それを考えとった。」

「それじゃあ、どうだえ、お寺の和尚さんに頼んで、虫や生きものも供養するんだということが分かるようなもんを書いてもらうことにするでしょうか……。」

こうして、真盛上人の教えで、阿久比谷の古来念仏の道場には大塔婆が建てられるようになってゆき、いつしか虫供養と呼びなされるようになりました。

### (3) 天正の法難

天正5(一五七七)年、秋の初め、ここ阿久比谷の家々は戸をびっしりと締め切り、その



暗がりの奥で、人々は震えながら息をひそめておりました。すでに女子供は遠く深い山の奥に隠しており、男ばかりが残っています。

坂部の阿久比城は、激しい戦いの末、幼い主君二人と城兵を呑んだまま、真つ赤な炎をあげて薄墨色の空をこがし、近くの寺々の伽藍も黒煙を上げています。

非情な戦いのならわしです。勝ち誇った寄せ手の兵士たちが城下の家々を襲い始めていました。目を血走らせた雑兵たちは、悪鬼のように家々の戸口を蹴破り、めぼしい金品を強奪してゆきます。――

「こらっ、百姓ども。なんだ、米はこれだけしかないのか。隠すためにならんぞ。」

「もし、そのお米は、わたらの大切な食いつなぎでござります。明日からその日に困りますだ。どうか少しは残してくださいませ。」

「何を、たわけたことを申すか。ここの領主は、逆賊として、あれあのとおりご成敗を受





けたのだ。おまえら城下の者どもも、その一味同類だぞ。まだ首がつながっているだけでも幸せだと思え。」

家財はことごとくひっくり返され、両手に獲物をかかえた雑兵たちの高笑いが響きます。「おやつ、これはなんだ。木箱の中に大切そうにしまつてあるぞ……。うむ、仏の画像か。だいぶ古びてはおるが、値打ちがありそうだ。やい、じじい、これも、もらつてゆくぞ。」

「あ、もし。それだけは困ります。大切な虫供養のご本尊さまでござりまする。今年はこの村が当番でお預かりした大切なもの。これを失いましたは、村々に申しわけがなりません。どうか、これだけは……。」

しかし、必死にすがりつく老人はたちまち払いのけられ、奪い返そうとした若者は、血煙をあげてくずれ折れます。

——まるで悪夢のような日が過ぎ去りました。

「のう、困ったことになった。大切な如来さまを奪われてしまった……。」

「新しいご領主の家来衆がなされたこと、いくらお願いに出ても、知らぬと、そつけない返事が返ってくるだけだ……。」

「ああ、仏さまはどこにおいでだろうか。もつたいないことだ。」

「悲しいことだ。もう虫供養のお勤めはできぬ……。」

阿久比谷は暗く沈み、人々は、がっくりと肩を落としてつぶやくのでした。

#### (4) 仏様お帰り

大阪夏の陣が終わり、淀君が豊臣秀頼と共に燃えさかる大阪城に死んだ翌々年の、元和3(二六一七)年の秋のことでした。

角岡村の平泉寺に、阿久比谷村々の代表十数人が集まってきました。

「これは、これは、皆の衆。おそろいで、何事でござるかの……。」

「はい、突然のおじゃまで、申しわけありません。実は、虫供養のごことでご相談に上がりました。長い間世の中が乱れて、本当に生き心地もせなんだが、やっと泰平を迎えることができました。それにつけても、絶えて久しい虫供養が気がかりでござります。」

「また始めたら、よろしかろうが……。」

「はい。……でも、戦で大切なご本尊さまを失ってしまい、虫供養ができません……。」

住職の円舜さまは、しばらくじつと考えておられましたが、一つうなずき、ひざをポンとたたくと、身を乗り出して言われました。

「おお、よいことがござる。寺に山越え阿弥陀さまの御画像がありますので、それをご本尊さまにして始められたら、いかがじゃな。」

人々は大喜びで、できるだけ早く復活しようと、手を取り合って約束しました。

——それから六十年ほどたった延宝のころのことでした。

草木村の仁右衛門さんは、所用で名古屋の城下へ出向いて、熱田へさしかかっておりました。

「おや、あなたは草木のお方ではありませんか。」

「ああ、これはお珍しい。以前、連歌の会でお世話になりましたお方ですね。お久しぶりでございますな。」

「よい所でお目にかかりました。住まいが、ほんの近くです。ぜひお立ち寄りください。」

「はい、それでは、お言葉に甘えて……。」  
どっしりとした構えの奥へ通されると、歌をたしなむ大商人だけあって、調度もおくゆかしく、あるじの手柄をしのばせます。

客間の隣は仏間で、立派な仏壇に、よい香のかおりが漂っていました。信心深い仁右衛門さんは、早速手を合わせます。

「おやつ…。」仏壇の横に古めかしい画像が掲げられているのに気づきました。

ちょうどそのとき、衣服を改めた主人が顔を出します。あいさつもそこそこに、仁右衛門さんは尋ねます。

「ご主人、あのお軸は……。」

「ああ、あれはなんでも百年ほど前、うちの先祖が譲り受けてきたもので、なんでも、法然上人さまが描かれた阿弥陀さまだということとしてな、それで、わが家でも大切にお供養を続けております。」

「これは、きつと、阿久比谷虫供養のご本尊さまに違いない……。」

お茶もいただかないで、早々にその家を辞した仁右衛門さんは、長い知多街道の道のりを飛ぶようにして帰ります。いつも気にかけてくださる正盛院の方丈さまや、村の古老たちと相談してすぐお迎えせねば。小走りの歩みにお念仏の声がまじり合いました。

## 虫 供 養



— 現代虫供養 —

江戸末期の「尾張名所図会」では、虫供養の起源を英比鷹が始めたとしているが、ここでは、「阿久比谷虫供養記」の説により、良忍上人の融通念仏の教えで始まり、真盛上人の影響を受けて現在の姿となったとしている。

良忍上人は、延久4年知多郡の上野町富田の生まれで、融通念仏宗を開かれた高僧。当町北西部が大野荘の一部に含まれた時代もあったので、その影響を強く受けたに違いない。文亀2（一五〇二）年の記録では、二十二村が参加するまでに発展した。

その後、天台律宗の真盛上人らの説く十念の功德などの虫供養として発展してきたが、その範囲が阿久比谷内に限られ、天正の法難を受けたり、植大地区の離脱があったり、明治維新の混乱にあたりしながらも、現在も維持されている貴重な民俗文化財である。

## 第十一話

# 雨乞いの竜

ここ椋岡の長光寺では、村人たちが大勢集まって、深刻な顔をして相談をしております。

「これだけ雨が降らぬと、畑作はおろか、稲の立ち枯れも出かかったようだ。今まで何度か雨乞いをしてきたが、なんのききめもなかった。いろいろ思案を試みたが、らちがあかぬ。この上は最後の手段として、衣ヶ池の竜神様へ人身御供をするよりほかはないと思うのだがのう……。」

庄屋の和右衛門さんは、悲痛な声で言い出しました。

「……かわいそうに、人身御供は生娘とい

ことだが、どこの家の娘にするか、決めるのがむつかしいなあ。」

「おらがお秋は、絶対にいやだ。」

「だれも、自分の娘を竜神様に差し出すのはいやに決まるとるが、このままでは、村中みんなが飢え死にを待つばかりだ……。一人の娘で、村中を救うことができればのう……。」

「気の毒だが、クジ引きで決めるしかない。」

「それでは、クジで決めてもいいかのう。」

和右衛門さんが言うと、しんとして、だれ一人頭を上げる者もありませんでした。

このとき、寺に泊まっていた一人の旅僧が立ち上がって言いました。

「皆の衆、人身御供は見合わせてもらいたい。そのかわり、拙僧が明の国で覚えた秘法をもつてご祈禱を試みましょう。」

村人たちは、ほっとして、

「どうかお願いします。」

と口々に言いながら、手を合わせて旅僧を拜

んだのでした。

衣ヶ池の周りは、うつそうとした大木が生い茂り、昼なお暗い、いかにも竜が住んでいそうな池で、村人たちもあまり近寄ろうとしませんでした。

旅僧は一人で池のほとりに祭壇をつくり、前に盥たらいを置き水を汲んで、お祈りを始めました。二日、三日、五日と過ぎ、七日目の夕方になると、池の上空に真っ黒な雲が広がってきました。

村人たちは、

「今度はほんとうに雨が降りそうだぞ。」  
と言って、空を見上げていました。そのうちに、大粒の雨と共に強い風が吹き、大雷雨と

なり、人々はみんな家へ入って、しつかり戸を締めました。



旅僧はなおも祈りを続けています。すると、

池の水面に大きな泡がブクブクと立ち、それが大波になったかと思うと、低く垂れこめた黒雲めがけて、一頭の竜がものすごい形相かたちで舞い上がっていききました。旅僧は、一心不乱に経文きんぶんを唱えながら、初めて見る竜の姿をしっかりと頭の中あたまの中にしまい込みました。

翌日から旅僧はだれも近づけず、眼のあたりに見た竜の姿を絵筆に託して一幅の絵にし、お寺と村人たちに別れを告げたのでした。この旅僧こそ、雲谷庵うんこくあん

雪舟という禅僧でありました。

その後、日照りの時にはこの竜の絵を出し、盥に水をいっぱい張って七日間祈願をすれば必ず雨が降り出すので、雨乞いの竜といわれ、寺の宝とされました。

この長光寺は、文亀3年法誉上人が雪舟の号をとり、竜臥山雲谷寺と改め、浄土宗に改宗されたといわれます。

## 雪舟



— 雲谷寺 —

雪舟（一四二〇～一五〇六）は山水画の大成者。12歳で京都相国寺に入り、禅の修行のかたわら画業研さんに努め、後山口の雲谷庵に住し、明に渡り、帰国後二十一年余、文正元年より一年余、十年くらい各地を巡り、多くの作品を残した。大野斉年寺には「慧可断臂図」（重文）があり、当地にも来訪したと考えられる。なお、本文中の衣ヶ池は、今の丸山公園付近にあったという。

## 第十二話

### 阿弥陀替え

昔のお寺は貧乏寺が多く、いろいろなことがありました。

「和尚さま、大変でございます。」

「作兵衛さん、こんなに朝早くから何事ですか。」

「はい、昨夜ご本尊の阿弥陀さまが私の家へおいでになり、作兵衛や。わしはこの雲谷寺に永らくいるが、三河のお寺へ行ってみたい。そなた、わしを送っていつてはくれまいか。とおっしゃるのです。私も本当に困ってしまい、早速和尚さまと相談してご返事いたします。とお答えをしますと、阿弥陀さまは、しるか頼んだぞ」と言われて、姿をお隠しになり

ました。

夢とは言え、どうしたものでござりましようか……。」

「はて、どうしたものかのう……。。」

「そうだ、ここから三河でいちばん近いのは刈谷だ。この阿久比と刈谷は、久松の殿様と水野家のお大さまが結ばれており、ご縁が深い。仏様がそうおっしゃるのなら、刈谷へお送りいたすことにしましうかな。」

作兵衛さんは、早速檀家の人を全部集め、夢のお告げの話しました。村人たちはびっくりしましたが、「お名残り惜しいが、仕方のないことだ。」と、お送りする準備を始めました。

先燈籠・四旗・天蓋・その後には仏様を立派な駕籠にお乗せして出発しました。羽織はかま、紋付きの作兵衛さんと、緋の衣を着けた和尚さまを先頭に、長い行列が続きました。

行列が阿久比から東浦へ入り、峠の頂あたりまで進んで行ったとき、なんとまあ、向こ

うから、こちらの行列と全く同じのがやってくるではありませんか。

とにかく、ここで待ちましよう、行列を止めました。

やがて、向ここの先頭の羽織はかまの人が問いかけます。「もしいや、阿久比の雲谷寺の方々ではありませんか。」

「はい、そうです……、どうしてお分かりですか。」

「実は私どもの寺は刈谷の実相寺と申します。先日ご本尊さまが私の夢枕に立たれて、阿久比の雲谷寺にわしの兄がおられるから、そこへ行きたい。」とおっしゃるので、こうしてお連れしました。」

作兵衛さんも自分の夢を語り、人々はあまりの不思議さにびっくりしました。そして、その場でご対面を済ませ、人々は乗り物を替えて帰りました。今も「阿弥陀替えの峯」と呼ぶ土地があります。